赤い手帖

今田　真理子

赤い手帖が出てきた。再び、赤い手帖に再びめぐりあったのは十数年前のこと。

ある日、思いがけず一人きりの時間ができた。さて、何をしようかと、偶然、開けたクローゼットの奥に、幾つものダンボール箱。中にはぎっしりと夥しい数のノート。広島の紀伊国屋や丸善へ行き、或いは外国で買い求めたお気に入りのノートたち。十歳ごろから書き始めたものだ。

日々の中で一瞬、きらり、ふわと浮ぶ思いや素敵と思えたことを書き留めていた。星のかけら、星屑集め、落穂拾い、貝殻探しなどと名づけていた。四半世紀前、いつか、何かしら書いてみたいと果てしない未来へ向けてしまいこんだものだ。一冊ずつ手にとると、過去が鮮やかに甦ってきた。そんな中から、二十一歳ごろの晩夏。

『呉の夕暮れの空を眺めていたら、ふるさとは、快星だろうと見込んで、外出していたまま、電車に飛び乗った。都会の生活に疲れて。一時間三十分余りの旅。呉線沿線ではもう明かりも少ない。

ふるさとの駅に降り立てば、もうそれで十分だった。

星が荘厳だった。言い尽くせぬ語らい。

呉の町で窒息しそうになっていた。ときおり。自然のなさに。

それは、図らずしも、生活の為の場所で、自らの一番したいことを封印しているからだ。生活の糧を得るための職業を営むことと引き換えに。

「帰ってきた。電話もせず、ごめんね」

「お帰り、いつでもいいよ」と母。父は、

「帰ったんか」と一言。嬉しそうに笑う。夜半近し。

翌日の夜。呉に帰り着けば、どっと現実が押し寄せて、疲れが怒涛のように舞い降りた。

静けさに満ちたふるさとのから、時間列車に乗って突如、三、四十年未来に投げ

出され、時間流の激しい世界へ舞い降りたような気分。夢うつつの、私のありたい世界から、現実の世界へ。大いなるギャップを感じる。

自分が、本当にしたいことをしていないことの疲労とでも言うのであろうか。信号のない街に生まれ育ち、海や野山、野畑、自然にあふれた中で過ごして来たのだ。地方都市の呉。そこに居るだけで緊張感が生まれる。懐かしい波音もない。露を帯びた草地も、星も。ときおり、いたたまれなくなる。

どちらが、自分にとっての現実の世界なのか、いずれ、バランスが取れるようになるのかもしれないが、異次元の生活であるには違いない。どちらも現実世界でありながら、乖離していている。空はつながっているが、狭い。海もつながっているが、砂浜はない。ストップモーションの世界から、時間に追われた現実の世界。その落差が大きく、帰郷の度に、戸惑う。埋められない時には、そろそろ仕事を辞めてみようかと逡巡するだけである。

身構えざるを得ない途方もない孤独というべきか、所在がなく、居場所もないような思いに捕らわれるのは、私だけだろうか。みな、世慣れた都会人で、そんな思いを微塵も抱いていないように見える。

呉駅に電車が到着した。冷房の効きすぎた列車から、駅に降り立てば、どっと残暑の厳しい空気が押し寄せた。すぐ傍で、ミンミン鳴き募る蝉。

母が土産にくれた重い荷物を持ち替えようと立ち止まった。蝉の姿を探すが、鳴いているのだから、すぐそこに居そうなのだが、姿は見当たらない。このことさえ、非現実のような気がした。

信号が一斉に変る。車が停車する。

ふうと、一息はきだし、横断歩道をわたる。

すると、もう、そこは、病院の寮に向かう境界線を越えた世界になっていた。

「星日和　二十一歳ごろ

台風が北上してきているのに
高気圧が張り出し
天気はすこぶる良好　星日和
どうしようもなくって
電車に飛び乗り　古里へ戻った

夜の誰もいない海で　独りきり
服のまま　10年ぶりに泳いだ
夏の終わり　星明りに
心と体を染めてきた
星明かりに　命の水に染まり
浮遊し一体化する
海は地球につながる　宇宙に連なる
一枚のカーテンだ
どうしようもなさは　宇宙に飛散した」

ふるさとの星空は、星々は一粒ずつ絡まりあい銀河が滔滔と流れていた。

「海辺にて　二十一歳の夏
真夏日の　すっかり　赤く
沈んだ　のちの　夜が来た
白砂　ほんのり　暑く
昼間の　余熱を　おび
しおは　さよ　と
やわらに　打ち寄せ
瀬戸の島浪　黒々　連なり
夜空に　赤い蠍の心臓　脈打つ
小石　ひとつ　投じれば
青白き　群れ星　ほとばしる
この思い　いかにせんか
この思い　いかにせんか
砂浜に　横たわれば
星と　潮騒の　洗礼うけ
ながるるは　ほしか
なみだか　まぼろしか
いずれ　こころ　おのずと

おだやかに　ととのはん」

「心
帰ろうか
帰ろう
何所へ？
何処へ行けども
何処へ行けども
この思いのやり場はなし
何処へ行けども
何所へ行けども
この思いの果てはなし
果てはなし
帰ろうか
帰ろう
何所へ？』

二十一歳の晩夏。瑞々しいときである。今、同じ文章は書けない。長いようであっという間の時間。三十五年前、電車に飛び乗り帰った家。父が亡くなり、母はグループホームに入所。家は、住む人を失い、もはや、入れ物でしかなくなった。

晩秋。それから間もなく、兄が、家を売るので、形見分けに欲しいものを取りに来いという。姉たちは、帰り場所がなくなったと嘆く。

家の中の荷物はあらかたまとめられていた。物は、使う人がいなくなると、殊更、わびしく見えた。抜け殻なのだ。

私は母の着物をもらった。

五歳頃の初夏、着物を虫干しする母の傍で、吊り下げられた美しい抹茶色の熟れた柿と鶯の描かれた着物を見て、「いつか、頂戴」と言うと、「これは、あげられない」と。いつも丁寧に扱っていた。そのわけがようやく、分かった。嫁入りのものだったのだと。中に、鮮やかな着物と、羽織も入っていたからだ。紐を解くと白い封筒

が出てきた。はて、書くのが好きな母、何を入れているのだろう。中には、一万円札が一枚。きっと、母は、私が受け取ると知っていたのだろう。もはや、母の記憶が曖昧と成った今、聞くことも出来ない。大切に娘へと渡してゆくつもりである。

翌年の正月明け、五年間寝込んだ義母が亡くなった。それまでも危篤を繰り返していたので、娘と最後に着せる着物を選んでおいた。うすいラベンダーの着物に羽織、紫のショール。粋に着物を着こなし、もてなし上手だった義母の大好きな色で送ってあげたかったのだ。よく似合った。このときは、嫁の立場で荷物を整理したが、やはり、大切に思う人がいて使うからこそのものであって、いとおしむ人がいなくなると、物はただの形骸にしか過ぎないと、しみじみ感じながら片付けをした。

私は、仕事上、異動も多く、其の度に引越しをする。何もかもとっておいた。しかし、最近は、「どうせ、あの世に持って行けるものはないし、全部、捨てちゃお」といいながら、片付ける。すると、まだ若いスタッフは、

「そんなこと言わないでください」という。いやいや、本当にいるものって、殆どないのだ。

私自身もそろそろ、身の回りを綺麗にしておかなければならない年齢になってきた。物は捨てられるがノートは捨てられない。しかし、文学賞を受賞したわけではないのだ。家族にとってでさえ、意味がないものだろう。捨てられちゃうんだろうなあ・・・。せめて、楽しみながら書いたものを整理して、文章に起こし、片付ける時間がありますようにと願うばかりである。

思い出や時間は、重なり合い、様々に脚色され、或いは脱色される。それぞれの立場や状況で変化もする。ノートたちは捨てないで置いてよかった。過去のノートから、再び、書くことの楽しみに出会えたのだ。これからも未来に向け書くだろう。

ふるさとや若い頃のこと、家にまつわる思い出、家族の遺品整理をする中で、人も皆、寄居虫のようなものだなと思うのだ。子供のころ、寄居虫は、人のもの（貝殻）に住んで、暢気なものだなと思ったものだが。

甲殻類は、脱皮し、ゾエア、クラコトエ、様々に成長してゆく。殻も成長に合わせて変えてゆく。人も住まいを変えてゆく。

しかし、永遠というものはない。身に纏ったものを今度は、上手に脱いでいくことになる。